

# 写真アルバムから

はじめに

森隆一



Pentax SP

(Ricoh Imaging Company より)



Canon F1

(Canon Camera Museum より)

## はじめに

1973年にカメラを始めた。この年の7月に、札幌でシンポジウムがありその後北海道を旅行した。北海道旅行はそんなに出来るものではないので写真を撮ってこようということで、父親にカメラを借りていった。現在も借りっぱなしである。このカメラはPentax SPで、DPEで引き延ばして配る手間が掛からない、ポジ・フィルム(スライド)で撮ることにした。

北海道旅行後は色々な写真を撮ることを試みた。寺社がメインではあったが、雑誌で“被写体に困ったら動物園に行け”とあったので、動物園にも行ってみた。動物の写真は、それなりに面白くはあったが、続ける気にはならなかった。花の写真も手掛けてみた。玄関先に鉢植えを置いている家が多く、散歩しながら、面白そうな花の写真を撮ってみた。動物の写真よりはこちらのほうが性に会っていた。野外で撮っていると、風が吹くたびにピントがずれ、修正することになった。さらに、白黒の植物写真は難しいことと、花の写真を撮るためには、当然ながら、季節に左右され、花の名前を覚えることが殆ど不可欠であることがわかった。接写に近い撮影では三脚無しでは非常に難しいということで、低位置での撮影が可能な高機能の三脚を購入したが、かなり、大袈裟になることから、三脚を用いる写真は殆ど撮ることがなかった。

このほかに、撮影会などにもでかけたが、石仏写真を撮るようになった

からは、これだけで手一杯となってしまったというのが大まかなところである。

現在デジタル化している(スキャンの終わった)写真から選んで、タイトルを“写真アルバムから”として投稿していくことにした。次の系列構成を考えている。

シリーズ C 寺社華風月 (白黒)

シリーズ D 旅の写真 (デジカメ)

なお、時期的にはこちらのほうが早く始めた‘シリーズ E 旅の写真 (アナログ)’は、ポジ・フィルムのデジタル化が出来るまで、先送りせざるを得ない。また、シリーズ名は A から始めるのが普通であるが、石仏の A・B と混同するので、C から始めた。

ここで写真撮影について振り返ってみる。

1975 年ころ、土門拳室生寺写真展‘室生寺’がされた。ここでの写真に圧倒され、意識はしていなかったが、写真のお手本、あるいは、‘こんな写真を 1 枚でも撮ってみたい’と思っていたことは確かである。同展のパンフレットを所持しているが、この展覧会は見たかどうかは記憶にない。古書店の書き込み等もないので展覧会で購入した可能性が高い。‘古寺巡礼’の宣伝パンフレットの写真も一時保存していた記憶がある。展覧会のポス

ターの写真を見た可能性も高い。幾つかの写真はお寺の絵葉書等にも使われていたと考えられる。これらの写真はカラーの者が多い。前2者は、かなりの大判の写真である。

Wikipedia「古寺巡礼（土門拳の写真集）」より

古寺巡礼は、日本の写真家である土門拳が、1950年代から1970年代にかけて、日本各地の古い寺院や仏像などを撮影した写真をまとめた、全五冊からなる写真集である。1963年から1975年にかけて、美術出版社から限定出版され、後年には英文解説を加えた国際版（英語：A Pilgrimage to Ancient Temples）も出版された。

古寺巡礼は購入しようかどうか数年悩んでいた。前漢を揃えると20万を超え、この金額ならば、写真機器を購入した方がよいと考えた。河原町丸太町の古本屋で見つけた第4集のみを購入した。1989年に小学館から「土門拳の古寺巡礼」が発行され、これを購入することで落ち着いた。

ここで、カラー写真は現像費がかさむことと、‘写真の上達には白黒写真のほうがいい’と勧められたことより、引き延ばし機Asahi Durst M30IとNikonの引き延ばしレンズなど現像器具一式を購入した。

この後も、寺社や風景を主にモデル撮影会などに出かけていた。白黒で風景や花の写真を撮るのは難しく感じていたので、石仏を主とすることに

なった。さらに、1777年9月に車を購入し、運転にも慣れ、石仏の所在地に容易に行けるようになった。白黒の風景写真は移動中に撮ったものが殆どであった。車ではこの過程がなくなり、また、駐車場所も簡単に見つかる所は少なく、1978年頃からは殆ど撮らなくなった。

1980年頃に、ブローニー・サイズのフィルムで撮る中型カメラを購入した。解像度が上がると穏やかな指針になるような気がした。これはもう少し撮ってあげればと残念に思っている。

1900年頃からは現像をしなくなった、何本かは未現像のまま30年たってしまった。

ほぼ見当はついていたことではあるが、石仏写真を中断している間に、デジタル・カメラの時代になった。DPE (Development, Printing, Enlargement) という用語を知っている人は何人いるであろうか。

デジタル・カメラの利点は、移した直後に写真を、その場で、確認できること。また、カラー・プリンタがあれば、簡単に引き延ばしができること。さらに、メモリの大容量化で撮影枚数が大幅に増え、メモリの交換はよほどのことがない限り必要なくなったことである。撮影時はファインダーで行い、モニターはオフにしておき、保存はjpgファイルにすれば、少々長い旅行でもメモリと電池の交換も不要である。最近では、ファインダーの機能もデジタル化され、モニターでの撮影でしか撮影できなくなっ

た。この場合は、予備電池と、長期の場合は、充電器の携行が望ましい。

石仏は殆ど撮らなかったが、旅行中(海外出張が主)コンパクト・デジカメでかなりの写真を撮ってきた。また、石仏もぼちぼち再開したが、再び停止中である。石仏をカラー・モードで撮るか白黒・モードでとるかが未定である。風景的に撮るものはカラーで、石仏単体は白黒が良いと思っている。デジタル一眼レフの白黒モードで(他の設定はいじらずに)試してみたが、これでは石仏にどうかという感じであった。コントラストの効いた設定を見つけ(、カラーバランスなどの機能を外し)、絞り優先・マニュアルフォーカスがどの程度可能かが問題となる。

フィルム・スキャンができないため、使用可能な写真は白黒で引き延ばしたものとデジカメで撮ったものである。引き延ばしは、初めの2年程はベタ焼きから選んだものを六つ切にしていた。これは、Asahi Durst M301 で台盤上で処理するとき、トリミングを行えば、六つ切が限度であったことと、紙の印画紙では熱感想が必要で、処理に時間がかかったことによる。その後、自然乾燥で引き延ばしが可能になったときに、器機も整え、キャビネに引き延ばして、ここから選んで半切に延ばすようになった。この最初のものに 15-11-1 の番号がふってある。これは 15 巻目のネガアルバムの 11 番目のフィルムの 1 番目の写真を示す。この 15 巻には、‘A4. 一乗谷 西山光照寺跡 1976’ が治められている。したが

って、本格的に石仏を撮り始めた以降の写真はその殆んどが含まれていると思っている。

キャビネは 5000 枚ほどで、半切は 500 枚ほどである。スキヤンの終わっている半切とキャビネに延ばしたものを石仏とそれ以外に分け、説明が付けられたものから紹介していく予定である。さらに、ベタ焼きも解像度を上げてスキヤンすれば、補助的に用いることがわかり、これも用いることにした。

デジカメで撮ったものはファイルの日付を見れば撮影日はわかるが、引き延ばしたものには撮影日や撮影場所がわかっていないものがありある。